

父と子 ― フェリックス・ホフマンさん

小さな絵本美術館館長
武井利喜

ホフマンさんのふるさとアールハウの常宿から、朝早くアールハウ市教会の塔を望み、鐘の音や小鳥のさえずりを聞いていると、すがすがしい解放感に包まれ、いつも幸せな気持ちになります。あの教会にはホフマンさんの作ったステンドグラスがすばらしい光を放ち、この町のあちこちにある壁画や、ステンドグラス、絵本の舞台になった町並、「おおかみと七ひきのこやぎ」にでてくるパン屋さん……どれもが、私の心に浮かび上がり、暖かく迎えてくれます。

最近の日本では、子どもに関係したつらい事ばかりが新聞をにぎわせています。新聞をみながら、ホフマン家の人々を思い出し、そこから生まれていった、ホフマンさんの絵本を、熱い思いで見つめます。

ホフマンさんの絵本は、ホフマンさんの子どもたちそれぞれが、何か特別な事（病気や誕生日）があった時に、その子のために作ってやった父から子への贈りものなのです。家族のあいだでの楽しみの時を持ったあと、時をへて世界中で出版され、たくさん子どもたちへの楽しい贈り物となりました。その絵本一冊一冊に関わるエピソードを、四人の子どもたち（長女サビーネ、次女クリスティアーネ、三女スザンヌ、長男ディーター）からお聞きすると、家庭でのやさしくて暖かい、そして仕事に対しての厳しい父親像が、伝わってきます。

ベッドの中で、グリムのお話を、たくさんたくさん子どもたちに話したホフマンさん。スザンヌが病気でひとりぼっちでいる時、アトリエから毎日2枚ずつ「おおかみと七ひきのこやぎ」の絵を描いてもってきた、ホフマンさん。クリスティアーネがひとり病気の療養に行く時、彼女の好きなネコをたくさん登場させて描いた「ねむりひめ」……。

たくさんエピソードから、父ホフマンさんと子どもたちの、深いきずなを目のあたりにし、今の私達に欠けているものが何なのか、わかりかけてきました。父親としてのホフマンさんを知り、ステンドグラスや壁画の職人的仕事を目のあたりにし、知れば知るほど魅かれます。―父親として、絵本画家として、職人として、そして一人の人間として―

ここに一冊の絵本を作るための束見本（何も描いていない白い本）があります。

真白な表紙の真ん中に、赤い小さな丸じるしが描かれています。「これは、次に日本の子どもたちに描くつもりだったものです」と、ホフマン夫人が話をしてくれました。まだ白紙のままの本を見て、どんな絵本ができたのだろうか、と、遠く思いを馳せ、ホフマンさんの温かいメッセージを感じました。

出典「父から子への贈りもの フェリックス・ホフマンの世界」
小さな絵本美術館©1998年発行